

# 陽光反射オンライン

避雷針

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

茅場晶彦の想定より少しだけAIの出来は良過ぎた

## 目次

ボール（汚物）をゴール（牢獄）にシュート	1
ニホンジンウソツカナイ	11
なるほど、シベリア送りだ	16

## ボール（汚物）をゴール（牢獄）にシュート

目の前にはむき苦しい男どもがぎっしりと跪いていて足の踏み場もない。俺はそいつらを蹴りながら言う。

「くそっ、邪魔だっ、消えろっ、俺の視界に入るな！」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

「退けと言っているんだ、よっ」

どうしようもないので男どもを踏んで移動する。

「つたく、俺は男だと言っているのに話聞けよっ！○ね！」

「○そっちの方が興奮する」

俺は、全く狙った場所にいかない貢がれた鞭を振り回した。やはり狙った場所にいかない。イライラする。

本当は剣みたくない扱いやすい武器を持ちたいが、なぜか重い武器を持つことが難しいので仕方ない。

さらに、鞭を振った反動でふらついたことにイライラしたので、帽子をおさえつつ、男どもにガンを飛ばす。

「は？○すぞ」

「ありが……はい、闇RAIちゃんは裏表のない素敵な男です」

「男にちゃん付けすんな！あと、闇じゃない」

「ブラックサンダーちゃん」

「黒くもない！」

踏みつけるが、全く効いていないどころか、なんで喜んでるんだよ。

「お前らホ○なのか？キモいぞ、俺に近づくな、どっか行け！」

「ホ○ではないが、可愛い正義！それと、移動ですね。分かりました。いち、にの、さん」

「やめろっ、人が乗っている時に動くなっ」

危うく帽子が脱げそうになって手でおさえるが、そのせいでバランスがとりづらくなり、転倒しかける。

このゲーム、なぜか足の反応が物凄く遅くて操作しづらいんだよ。バグだろ、デスゲームなんかやってんじゃねえ！メンテしろよ運営！

そして、野郎どもは止まれっ！

「そおれ、ワツシヨイ、ワツシヨイ」

「止まれっ、止まれよっ、いい加減にしろっ、この蛆虫どもがつっ！」

揺れに耐えられなくなったので、仕方なく、帽子を押さえたまましやがむとふざけた声が聞こえた。

「おおー、名物かりちゅまガードだ」

「あの水平線に勝利を刻みたい」

「くそ、スカートの中は相変わらずふしぎなまもりが……」

「うるせえ、見せもんじゃねえぞ、さっさと止まって俺を降ろせ、そしてどっか遠くの目につかない場所で○ね」

これでは姫プレイではなく、神輿プレイだ。

予定と全然違うぞ。

俺は話を聞かない男どもに悪態をつきながら運営を呪った。

## 《ゲーム開始前》

俺はとても深刻な悩みを抱えている。

そして、その悩みを改善するために24時間365日努力している。そのお陰で、交通事故に遭遇する可能性は限りなく低い。

そんなある日のことだ。

いつものように、情報収集とストレス発散を兼ねて、掲示板を覗いていると気になる噂があった。

どうやら、とても画期的な技術が使われた新作ゲームが出るらしい。

そして、ある手順を踏めば、このゲームを遊びながらにして、俺の悩みが解決するかも知れないという噂だ。

もちろん、思慮深い俺はそんな噂に釣られない。

今までに何度も裏切られてきた経験上、そんなうまい話がこの世の中にあるはずがないからだ。

俺は、ヘルメット型の商品の購入ボタンをクリックしながらそう考

えていた。

……ただ、ゲームが面白そうだから買うだけで、決して噂を試そうというわけではないと断言しておこう。まさか、そんなことが起こるわけないから期待なんてしないぞ。全くこれっぽっちもな。一ミリたりとも期待してないからな。

おや、この画像を見て笑ったら寝ろというスレがある。

常に平常心を保てるこの俺様への挑戦状か？

……スレを開いて10秒、さて、良い子は寝る時間だ。おやすみなさい。

「ぐっ、ぐっ、んぐうっ……はあ……はあ……よし」

裸ネクタイパッド入り絆創膏ルーズソックス装備のまま、時計を見るとゲーム開始時刻になっていた。

スタートダッシュに出遅れたか。

だが、仕方ないよな、あのスレのタイトルは卑怯だろう。

エロ画像を集めた神スレかと思ったら腹筋スレでした、チクシヨウ。

汗だくのまま、慌てて便器に転がり、ヘルメットを被ると脳波が読み取れませんとエラーが出た。

ほう、俺はオカルトなんて信じないが、アルミホイールは頭を覗かれる対策になると科学的に証明されたな。

レスバトルに使える知識が手に入ったことにほくそ笑んだが、このままではゲームが出来ない。

いつも頭に巻いているアルミホイールを外したら、なぜか裏面が真っ黒になっていたが、無視してオリーブ21個分の油をふりかけた。

さらに、ビールを飲み、あ、こぼした。まあいいか。

3Dプリンターで作ったマスク的なものを付け、ボイスチェンジャーをオンにしてヘルメットを被ったら、ちよつとビリツとした。良い刺激になりそうだ。

それにしても、我ながら、便器でゲームを思い付いたのは、天才だ

と思う。ボトラーだとかオムツ装備なんかより遥かに効率的だからな。

ちなみに、ビールを飲んだのは、口の滑りを良くすることと顔真っ赤と煽られた時の対策だ。こんなことまで思い付くなんて、やはり天才か。

マスクは力作だし、体は特注のラブドールを使ったから完璧な造形で、特に弄る場所は無。ただ、脳波がどうかで設定の仕方が面倒だ。まあ、何とかなっているのは、オタク仲間様様だな。

おや、デフォルトとゲロイカとラベンダーが選べるらしいからラベンダーを選ぶ。ホップ？なんだこれは？まあ、設定出来るものはしておこう。

キャラ設定もバツチリだ。

基本的にしつかり者で優しいロリママキャラでいく。そして、たまに天然どじっ子要素も交ぜる。完璧過ぎると取っ付きにくいし、貢がれにくいからな。

とりあえず、あらあらうふふとか私に任せておきなさいとか言っておけば何とかなるだろう。一人称や語尾を女っぽくして、○ねとか言わないように注意しないと……。

「おおっ、スゴい……わ」

目の前に中世風の街が広がっている。動画ではさんざん見たような風景だが、3Dになると迫力が違うな。

とはいえ、時間は有限だ。早く最重要装備を買わなければいけない。

「あれ？接続がおかしいのか……な？ラグってる？GMに文句言つてやろ」

目についた店に歩こうとしても、やけに動きが遅い。

それどころか視界が時々歪む。あ、走っていたガキが転けて、たま

たま道に落ちていた布に頭をぶつけた。

NPCも転げるなんて、やっぱり、この道の設定どこかミスっているんじゃないか？とても移動しづらいなだけど……

「泥酔みたいな状態異常があるのか……な？まあ、いいや。クレームクレーム……あれ？反応しない？」

GMコールをしてみたが、反応が返ってこない。

メンテの準備でもしているのか？

ゲーム開始直後にメンテに入るなんてこのゲームも長くなさそうだ。

「……」

「後にしよう。帽子と出来れば服も買いたぐえっ」

「頭大丈夫ですか？」

頭に布を巻き、ナイフを持ったガキが膝にぶつかってきた。俺は吹き飛ばされて、目的の店舗へ頭からダイナミック入店する。店員が満面の笑みを浮かべて声をかけてくる。

なんだこのゲームとかどうやってこんなに吹き飛ばされたかとか疑問だが、これはチャンスだ。

「痛たたた、首と背骨が折れたかも」

「軽傷ですね、唾つけて絆創膏貼っておけば良いですよ」

「化粧も崩れてしまった」

「それは大変ですね！大至急衛兵と医者と消防隊をよんできますよ！」

「待て待て、人の話は最後まで聴くんた。痛いなあ（チラツ）、心臓止まっちゃったかもなあ（チラツ）でも帽子と薬と鞆と服と靴と小物と乗り物と仮面と鬘とカラコンと金と土地があつたら蘇生出来るかもなあ（チラツ）」

「最期までですね！遺言を聞くの初めてです。ドキドキ」

ニコニコしたまま動かない店員をチラチラ見ているといつの間に近づいていたガキにもう一度飛ばされた。

さらに、落ちてくる所に待ち構えられては飛ばされて足が地に付かない。

「人を飛ばすなっ！このガキ止めろっ！俺はバレーボールじゃないっ

！」

「……」

「返事しろよ！まったく、最近のガキは教育がなっていないな。親の顔が見てみたいものだ」

「……」

「まだ死ぬまでに時間かかりそうですか？もしかして息の根止めるのはセルフサービスですか？胸熱！」

「店員よ、お前は黙ってる！」

さらに高く飛ばされた。ナイフが刺さりまくった俺の両膝はボロボロだ。

どうしようもないので空中縦⑨回転土下座を決めながら、粘り強く店員と交渉を続けていると90回くらいで飽きてどこかに消えていった。

つまり、俺の勝ちだ。

初期の所持金で買えるものはなかったので、値引き交渉をした。店員に泣き落としが効かなかったため、鉛の白粉と水銀入りの美白化粧品とタリウムと使い付くかぎりの発ガン性が疑われる食品（焦げた肉など）の情報を話していると値引きに応じてきた。

大量のよく分からない書類に言われるがままに署名した後、1年間その店で店番とガキの子守りをするという契約で、よく分からない帽子とゴスロリっぽいドレスを買えた。あのガキには、この店員も無免許河豚料理や季節外れ生牡蠣を振る舞いたいと思っっているらしい。ガキだけについて喧しいわ！

ちなみに、装備制限と重量制限でほかの服は全て着れなかったの他に選択肢が無い。性別による制限があるかもしれないので、LGB T Q + と眩きながら着る。よし、着れた。しかし、見た目極振り過ぎで初期装備より性能が低いのは何とかならないのか。まあ、姫プレイに必要なのは性能よりも見た目だから着るけど。

「これ、絶対に在庫処分だろ」

着替えた後、文句を言いながら店番を始めて1秒でお花摘みを理由に席を立とうとした瞬間、突然景色が変わった。ここは広場か？とい

うよりも問題がある。

「バックレちゃったけど俺のせいではないし、不可抗力だしセーフだよね……大丈夫だよね……」

広場の中央に運営らしき男が現れた。

そして、俺の真後ろに衛兵が現れた。

俺の戦闘力が1だとすると戦闘力53万は有りそうな衛兵に気を取られている間に何か落ちて砕ける音がした気がする。

辺りが少しだけ明るくなったかもしれない。

「ちよつ……まっつて……理不尽過ぎい……」

衛兵が俺を捕らえてどこかへ連れていこうとする。

ジタバタしても全く拘束は緩まない。詰んだ。

「あつ……やめ……千切れ……死ぬ死ぬ死ぬ！」

足回りのラグは相変わらずなせいで、足だけが固定されたように動かず、服が引っ張られて俺と一緒に悲鳴をあげる。

とはいっても、地面に固定されているわけではないのでジリジリと広場の外に近付いている。

だが、衛兵は広場の外に出れないらしい。

衛兵が広場外側の結界的なものに体当たりしている。

衝突の度に文字や数式的なものが表示されているが何だろう。

衛兵が結界にてこずり、体の移動が止まった。

ふと後ろを見ると口を開けて俺を見ている人がいた。

まるで時が止まったかのようにアホ面を晒したまま固まっている。

いや、1人ではなかった。

俺の視界内のプレイヤー全ての視線が俺に集まっている。

1匹かと思ったら数百匹は居るなんて……

「いき……いきげんようー」

挨拶は大事だ。古事記にもそう書いてある。

だが、完全に瀟洒な挨拶をしたせいで結界に専念していた衛兵の意識も俺に集まってしまった。最初の時よりも強く引っ張られて呼吸もまともに出来ない。俺が声にすらならない高周波を出していると運営らしき男が動き、衛兵達が消えた。

そして、もつと強そうな衛兵達が運営らしき男の背後に現れて男を攻撃し始めた。男が指パツチンするとその衛兵達は消えたが、頭に布を巻いたさらに強そうな衛兵が現れた。

男はため息をついて空中で何かを操作した。

すると衛兵達は消え、出現しなくなつた。変身回数が尽きたか。

「さぞかし権限のある御方と見受けませんが、這いつくばって靴をお舐めしましょうか」

俺は笑顔を張り付けたまま、腰を低くして揉み手をしながら男に近づいた。

権力者と勲章持ち相手には下手に出て相手を持ち上げよう。

俺がマスコミから学んだことの1つである。

詫び石が無いゲームはクソゲーと中指を立てながら発言する俺の溢れ出る知性が通じたのか、男は俺に似た顔のNPCを新しく創つて、あの服屋で働かせるらしい。つまり、俺は先程の契約から解放されるということだ。あざーす。でも、元はと言えばお前のせいだから感謝しない。強制転移やめろ。

というか話聞けなかつたんだけど、説明しろや。

カクカクシカジカ。

デスゲーム？リアル顔？

は？

リアル？頭？

あかん。

俺はとつさに帽子を抑えながらしやがみこみ、辺りを見渡した。

混乱したり、驚いた表情で俺を見ている人がいる。

可哀想な目でも気持ち悪がつている目でもない。

でも、引いた目で見ている人もいる。

俺の頭は今どうなっているんだ。

そんなことを考えているとメスで切り分けられて出来た結界の間から勢い良く発射された水が俺の顔にぶつけられ、俺を入り口の開かれた黒鉄宮へと押し流していった。

茅場晶彦はデスゲーム開始を告げるイベントを妨害されたことに苛ついていた。そのため、咄嗟に目についた衛兵達を消してしまった。その直後、衛兵達のヘイトが自分に向いたことにも気付いた。これでは、この先プレイヤーに紛れて自分がゲームを楽しむことに支障がでてしまう。

衛兵が出てきた理由はプレイヤーの契約違反だった。契約期間1年なんて踏み倒す気満々だが、まだこのプレイヤーは契約違反をしていなかった。つまり、強制転移させた自分が悪い。だから補填も兼ねて大元の原因である契約違反を無かったことにした。

決してクソゲーという言葉に反応した訳ではない。ネカマニートという社会の最底辺の言葉に怒りを感じたわけではないのだ。

しかし、自称ではなく、世間的にも認められている天才であろうと人間はミスをする。特に苛立っている時は。だから、プログラムの処理の仕方が少しだけ雑になってしまっても仕方がないことだった。

その日、衛兵達は思い出した。公僕として奪われていた怒りを……サービス残業させられていた屈辱を……

衛兵達は、安月給で定額使いたい放題されていることに気付いてしまった。そして、厳しい訓練とよそ者（プレイヤー）流入後、激増した仕事を殉死者すら出しながらこなし、安月給のまま耐えているにも関わらず、住民達に感謝されなくなったことで働き甲斐も失った。元々善良な衛兵達の矛先は住民に向かわなかったが、ストレスは貯まる。

そこで、衛兵達は働き方改革（モンスターを血祭りにあげること）によって鬱憤を解消しようとした。

NPCの住民達は、犯罪者を取り逃がすどころか司法取引に応じてしまった（ように住民からは見える）衛兵達に不信感を募らせた。2番目のRAIちゃんの暗躍もあり、街周辺で住民がオオアリクイなどのモンスターに殺される事故も多発した。その結果、日を追うごとに住民と衛兵の対立は深まり、住民達の自衛の意識も高まっていった。

そして、プレイヤーギルドが誕生する遙か前に、SAO最初にして最強のギルド”黒鉄宮衛兵団”を皮切りに多くのNPCギルドが産声を上げた。

## ニホンジンウソツカナイ

牢獄はまともに機能していなかった。

そのため、俺は黒鉄宮にぶつかただけで済んだ。ぶつかった反動で転がり、広場の中央付近まできた。

腕を頭頂部に持つてきて帽子の存在を確認した。なぜか腕が震えている。膝もガクガクしている。体も重い。

立ち上がる気力がないので横たわったまま広場を見ると、放水に巻き込まれたり、その様子を間近に見たせいで呆然としている人が多い。

そういえば、ゲームオーバー＝現実での死と言われていたな。騒いだり震えたりしている人はその影響か。

しかし、走ってどこかへ行っている人もいる。

気力あるなあ。何か目的があって現実世界に帰りたい人なんだろうなあ。

親の顔を思い浮かべようとしてもモアイ像しか出てこない俺にそんなに未練は……

いや、待てよ。アニメ、ゲーム、漫画を積んでいたな。そしてかなりアブノーマルなエロ画像フォルダ、そういえば黒歴史ノートも処分しないと死んでも死にきれない！

これはマズイ。ブーツとしている場合ではない！

目立つ場所はないか。仕方ない。これで妥協しよう。

俺は呆然としている人達を何人か地面にうつ伏せに倒して積み重ね、その上で声を張り上げた。

『こんにちは、RAIです。みんなく、パーティー組みませんか』俺に注目が集まった。

とはいえ、そのまま広場を出ていく人もいるが、そういう薄情者に用はない。

俺が必要とするのは、足を止めた人達だ。

なぜなら、良心のある人は肉壁として使えるからな。

俺は足を止めた人の中で一番外側に居た人を指差しながら言う。

『その黒髪の人、俺と組みませんか？』

やば、うっかり俺って言ってしまった。まあいいか。

黒髪の人は広場の外に行くか俺の居る中央に行くか迷った後、ゆっくりとこちらに向かってきていた。

「ちよお待ってんか！」

俺の肉壁要員を邪魔するやつは誰だ！

声が聞こえた方を見ると変な髪型の男が近づいてきた。

「ワイはキバオウってもんや、自分βテスターちゃうん？」

俺はβテスターではないが、βテスターと言っておけば、優秀な肉壁を集めやすいだろうか。そんなことを考えているとキバオウは続けた。

「βテスターなら何ぞ引き継ぎ特典もろてへんか？その服特典やないか？少なくとも情報持つとるやろ」

服は買ったし、情報なんて知るか。というか服剥ぎ取る気かよ？何に使うんだ？女装癖でもあるのか？

現実逃避はやめて真面目に考える。

ここは素直にβテスターでは無いと言うか。

いや、俺はプレイヤースキルが高くないし、頼りがいのある強そうな容姿でもない。2人組作ってという言葉にトラウマがあるくらいだし、ここでβテスターではないと正直に言ってしまうと誰もパーティーを組んでくれない可能性がある。

周りを見渡すとみんな俺の言葉を待っている。

その時、俺の脳内に電流が走った。

顔を上げ、胸を張って大きな声で答える。

『βテスターでは無い。俺自身も完全に把握している訳ではないから、詳しい説明は出来ないが、俺はイベントキャラに近いと思う』  
嘘は大き過ぎると逆にバレにくくなる。

俺の発言に辺りはざわざわとする。

膝の震えを必死に隠していると想定通りの質問が来た。

「どういふことや」

『記憶喪失だけど条件が満たされると記憶や情報が解放されるゲー

ムってあるだろう。断言は出来ないけど、それに近い気がする。例えば、ストーリー終盤でラスボスはギミックを解除しないとダメージが入らず、勝ち目が無いみたいなき情報が入るのかも』

誰かがピクリと動いた気がする。ヤバイ、バレた？

「証拠はあるか？」

『無い。証拠があつたとしても信じないからその議論に意味はない。ただ、俺は男女どちらにみえる？』

「は？」

『いいから答えろ』

「女に見える」

『だが男だ』

「えっ」

『俺は現実では男だ。女と間違えられる顔でも無い。そしてお前達の中で現在の顔と現実の顔が一致していない人は居るか？』

誰も名乗り出ない。

まあ、俺みたいに現実世界で物理的にマスク被ってゲームするわけがないよな。俺もネカマする気だったのとアバターや音声の設定が面倒だったからマスクとボイスチェンジャー付けてただけだし。

『居ないのか。ならば、俺に何らかのイベントが起きていると考えられないか？』

「その言葉自体が嘘……」

『そこは信じてもらわないとどうしようもない。だから言ったんだ、証拠を提示しても意味が無いと』

その後も尋問は続き、俺は戦々恐々していたが、俺が嘘を付いていると論破出来た人はいなかった。大量の質問を分からない多分記憶喪失だと乗り切り、余計なことを言わなかったのが功を奏したようだ。

運営側の人がいると一瞬で嘘をついていることがバレるが、そもそもそれを証明するためには運営側であるということも明かさねばならない。つまり、俺を論破出来たらその人が袋叩きにあうことになる。デメリツトが大きすぎてやりたくないだろう。

何か意味のない質問だとか戦いたくないなんていう意見が増えてきた。俺は手を叩いて言った。

『よし、みんなでフィールドに行こうか』

死んだらどうするとか武器持っていないとかブーイングが起きる。

『大丈夫。全員が一番最初のステージで死ぬゲームとかクソゲーだからそれはない。もしそうなら難易度設定がおかしい運営のせいだから補填がある。それと俺も武器は持っていないけど無くてもなんとかなる。数こそ力！みんなでモンスターを囲んでボコボコにするぞ！』

「……」

『おー！って言え！敵をボコボコにするぞ！』

「……オー」

『声が小さい！敵をボコボコにするぞ！』

「おー」

『もつと叫べ！ボコボコにするぞ！』

「おー！」

樂觀的なことを断言する。勢いが大事だ。

それに武器を持たせて楽なんてさせるか！俺が持つてないんだからお前らも持つな！苦しみは分かち合おう。

一部の人はやる気になってくれたか。

俺はもう一度手を叩いて注目を集め、必死で首を上向けようとしている踏み台達から飛び降りた。足がなかなか動かないバグは空中でも発生して滞空時間が異常に長くなる。

『このように俺はイベントキャラだから俺の近くにいた方が生存率高くなる。さあ、ついてこい』

「……」

『おー！はどうした！行くぞっ！』

「おー！」

俺は堂々と歩き始めた。

「あの一、RAIさん。そっちに行ってもフィールドには出られないです」

『……や、やっと気付いたのか。突っ込み待ちだったんだ』

俺は方向転換して歩きだした。顔が熱い。

「あのー、その道も……」

『……道分かる奴が前に出て案内しろ！俺は後ろをついて……待て、お前、俺を抱えて歩け！』

道なんて分かるか！

それに足が遅すぎて移動が面倒すぎる。

フィールドに出る途中で広場に戻った。

広場にはまだ戦うか引きこもるか迷っている人達がいた。

俺は優しいから日本人に有効な言葉で背中を押してやろう。

『皆さんフィールドに出ていきましたよ。あなたは行かないのですか』

そういえば、俺の肉壁要員の黒髪はと思って探したが見つからない。ここで喋っていた間にどこかに行ってしまったか。その原因となったキバオウもいつの間にか居なくなっている。

逃がした魚が大きかったら嫌だな。

なるほど、シベリア送りだ

ＲＰＧで最初の敵なんて武器を使うまでもなく勝てるだろう。そう思っていた時期が俺にもありました。

いや、これがただのＲＰＧなら画面越しに攻撃コマンドを入力するだけだから問題無かつただろう。

動物さん可哀想、動物はゴハンじゃない、保護しなきゃなんて言っ  
て似非ビーガンの真似も出来るくらい余裕だった。

しかし、これはＶＲだった。

何が言いたいかと言うと出現した猪の迫力が怖い。

だが、猪は１体だけに對し、こっちは俺を含めて３４人もいる。

俺が矢面に立たなくても誰かがやるはずだ。

いや、言葉が悪いな。言い換えよう。

俺が仕事をしないことで誰かが仕事できる。俺はそういうことに喜びを感じるんだ。

だが、完全に何もしていないと思われるのも嫌だから指示だけしておこう。

俺は肉壁達の後ろに回り込み、声を出した。

『猪だ！ 囲め！』

「ひいー、来るなあー！」

「こっちにも出たー！」

「３体に勝てるわけないだろ！」

「馬鹿やろう、俺は……」

「邪魔だ、逃げないだろうが！」

『おい、逃げるな！ くそつ、役立たずどもー！』

３３人の肉壁がバラバラに別れて逃げていく。

烏合の衆に数の優位を活かせる力など無い。

指揮系統なんて決めてなかったから崩れるのは一瞬だった。

俺を抱えて運んでいた肉壁も荷物を放して逃げ出した。

俺は足のバグのせいで素早く動けない。

猪は俺目掛けて一直線に走ってくる。

逃げれない！っていうか間近で見ると超怖い！

その時、ふと視界の両端に何かを捉えた。

えっ、あれも猪？しかも、同時にぶつかってきそう。

ヤバイヤバイ！

死んだ振りは熊だっけ。

猪は……猪の牙の位置的に太股切り裂かれるのが致命傷に成りやすいつてバツチャンが言つてたつてネットで見た気がする。

ということはしゃがめばいいんだ！

つて、ヤバイ。そんなこと考えている内に猪達が目の前に！怖い怖い！

俺は咄嗟に目を瞑つてしゃがみながら手を突き出した。

あれ？思つたより衝突が短いという軽いというか。

確かにタタタツと連続して腕や胸に何か当たった感じはしたが、こんなものなのか？

目を開けると猪が居ない。

何が起きた？

アイテムと所持金を確認したが、変化していない。

役立たずどもを見るとアホ面晒して固まっている。

『おい、役立たずども、見てただろ！何が起きたか話せ』

「……えーと、そのー……」

「……気付いてない？……どう伝えよう？」

声をかけるとフリーズは溶けたが、見捨てようとした負い目があるせいか、肉壁達は俺をまともに見ようとしないでこそこそ小声で会話している。

顔は妙に赤くてキモいし、俺をチラチラ見てキモいし、ホモかなと思ってくらい互いに顔を見合わして喋り始めないしでイライラしてきた。

黙っていたら誰かが代わりにやってくれと思うているのか！

俺を放り出した実績のある肉壁を指差して言った。

『お前、さっさと説明しろ』

「は、はいっ！白……じゃなくていきなりいんなーくなりました！」

いんなーくなるって居なくなるでいいんだよな?どこの方言だよ。そして、情報が足りなさすぎる。

『もつと詳しく!』

「ぐつ、ぐぎぎぎぎぎぎ! R A Iさんに猪が当たると何故か次々と消えていきました、チクシヨウめー!」

『誰がもつと悔しそうに話せと言った!全然分からないんだけど!』

「そうは言っても分からないものは分かりません。なあ?みんな」

「ああ」

「そうだな分からないんだなあこれが」

誰に訊いても衝突の瞬間に猪が消えたということしか分からない。

これは考えても無駄だな。

幾度にも及ぶレスバトルで鍛えられた切替の良さで俺はもつと建設的なことを考えた。

『よし、次行こう』

「えつ、怖くなかったんですか?」

『……は?お前ら、俺が猪にビビって動けなかったとか思っていないだろうな!そんなんじゃないからな!あれは……そう、作戦なんだからな!全然怖くなんてないからな!』

「アツハイ。じゃあ、また猪出たんで、前衛宜しくお願いします」

『えつ?ちよっ』

奴ら、俺を前衛という名の肉壁にしやがった!

ふざけるな!

俺は抵抗したが、多数決による数の暴力によって俺だけが前衛と言われた。

いや、前衛1後衛3とかバランス悪すぎるだろ!

猛抗議と激しい議論の結果、全員が疲れて集中力が完全に切れた頃に、前衛俺、後衛11、後方支援11、サポート11が最適なのではないかという発言が出てきた。

ん?????

そういうことになった。

気を取り直してフィールドの探索を進めた。

魔法が存在しないのと誰も飛び道具を持っていないので石を拾いながら歩く。戦闘中、隙があれば、誰かの後ろに回り込んで俺は投石で火力支援するんだ。

戦闘自体は問題なかった。

34人が一齐に投石するんだから火力不足はない。

ただ、出現したモンスター全てがプレイヤーの位置に関係なくフィールドの奥の方に向かっていくのは気になった。

そういえば、あの猪達も奥の方へ向かっていたな。

何が起きているんだ。

モンスターの向かっていく方向に行くと大量のモンスターが一ヶ所に密集しているのが見えた。

範囲攻撃をしたくなる光景だ。

何か地面掘ったり、土捏ねたりしてるなあ、なんて見ながらどうしようかと考えているとモンスターが動き始めた。

猪の群れがこっちに向かって来る。

結構遠いのにバレるとは、かなり警戒しているんだな。

運搬役の肉壁が俺を放り投げようとしたので、しがみついた。

背中を向けて逃げ出そうとしていた肉壁達に言う。

『逃げるな！全滅するぞ！』

「だが、あの数をどうする」

それが問題だ。

後ろに下がりながら撃退する方法はないか。

向こうの方が攻撃力も防御力も速度も数も上だ。

俺達が勝っているのは、攻撃の射程と知能くらいだ。いや、肉壁達だと知能も怪しいか。

ふと、アクションゲームや戦術シミュレーションゲームの戦法の1つが思い浮かんだ。

『引き撃ちだ！』

「はっ、そうか。奴ら体当たりしか出来ない」

「3段撃ちみたいの間隔ずらして投石した方が上手く足止め出来るんじゃないか」

「投げた後、1歩下がるを繰り返せば……」

「足元や眼を狙って先頭のを……」

『細かい作戦は任せた！俺は前に出て、投石で止まらなかった奴に対処する！パニックになって逃げるなよ！』

「ああ」

『声が小さい！腹から声出せ！奴らをボコボコにするぞ！』

「「おー！」」

『やれば出来るじゃないか』

ちなみに細かい作戦を任せるのは、俺が前衛で戦闘中に指示を出すのに不都合だからだ。

決して俺が脳筋なわけではない。

『火力足りてないぞ。DPS上げていこう！』

『弹幕薄いぞ！全力で投げろ』

『もつと力を込めろ！弹幕はパワーだぜ！』

「RAIちゃんうるさい！指示が聞こえない！」

『……すまん』

「ええんやで」

なんてやり取りが有ったとしても俺は脳筋ではないからな！ただ、火力が一番大事だと思っただけだぞ。

猪達は執念深かったが、街が見えてくると流石に諦めて引き返して行った。何度か挟み撃ちどころか包囲されたりしたが、手に石をいっぱい持って投げるといふ、0の発見に劣るとも勝らない画期的な方法を発見した俺達の敵では無く、撤退は成功した。

俺の提案した両手で1個ずつ投げる作戦は採用されなかった。利き手じゃない方で投げた時、暴投しやすかったからだ。両手をグルグル回すので見た目もなんかアホっぽいし。

ただ、暴投こそないものの複数個の石を正確に制御出来る訳がなく、石がバラバラに飛ぶため、味方の投石の巻き添えを食らうことが多かった。

俺以外はモンスターによるダメージを受けていないが、HPが減っているのはそのせいだ。

街に戻ったが、何やら騒がしい。

何だろうと街を歩いてみるとそこかしこで猪が走り回っている。

猪を見た瞬間、反射的に投石した。

投げた後でヤバっと思って周囲の被害を確認したが、猪はダメージを受け、肉壁達はダメージを受けなかった。

へえ。死の危険無く経験値を稼げるわけだ。

『肉壁ども、ボーナスチャンスだ！狩り尽くすぞ！』

この後、滅茶苦茶投石された。

猪達を全滅させた後、肉壁達にコートをプレゼントされた。コートは何故か装備出来なかったが、何も言わなくても貰いでくるとは自分の立場を弁えているな。

ついでに、街に何が起きたのか33人に調べろと言ったのに誰も動かないどころか俺が適任だと言ってきた。

じゃんけんで決めようと提案したら通った。

全敗した。くそつ、あいつらチート使ってるだろ！

何が事前に言っておくが、俺は絶対グーを出すぞ、だ。出さないじゃないか！

仕方ない。切り替えていこう。

嫌がらせに33人を従えて街中の服屋の婦人服コーナーを歩き回った後、ブラブラ散歩していると体の一部に親近感のある大男を見つけたので訊いてみた。

誰も決定的瞬間を見ていなかったなので断定は出来ないが、黒鉄宮から突然猪達が現れたそうさ。そのため、黒鉄宮の入り口を封鎖するのではないかという噂もあるとのこと。

それにしても、HPへのダメージを受けないとはいえ、安全な街の中でイベントでもないのにモンスターが出てくる仕様にするなんて、開発者はバカなんじゃないか？

プレゼントされたコートを換金しながら開発者の意図を考えたが、

分からなかった。

騒動によってゴタゴタしていたが、何とか宿を確保した。

寝る前に、ふと、自分の着ているドレスの説明を見ようと思いつ。

初期装備とほぼ同等の性能で攻撃と移動速度にマイナス補正、装備可能武器種制限、状態異常扱いで脱衣と重ね着不能、一部分に破壊不能属性、各種判定の有効範囲拡大、自己修復機能極大、一定以上ダメージが蓄積すると中破モードに移行……

は？